

## 研究所で働く、研究者ではない人たちの話

Those Who Are Not Scientists and Who Are Working in an Institute of Science and Technology

産総研, <sup>○</sup>井川 奈々子, 増田 淳

National Institute of Advanced Industrial Science and Technology, <sup>○</sup>Nanako Igawa and Atsushi Masuda

E-mail: n.igawa@aist.go.jp

就職して初めての夏、帰省先で高校の後輩（理系）から質問されました。「井川さん、なんで産総研で働いているんですか？」と。研究所で働く人といえば、研究者なのだと、このときあらためて思いました。産総研の常勤職員のうち約 2300 人が研究職ですが、一方で“研究者ではない人たち”、つまり事務職も約 700 人働いています。産総研に限らず、研究所で働く“研究者ではない人たち”の仕事内容は、外からはあまり見えないようです。

2011 年 6 月から 2014 年 4 月まで、私は、とある共同研究に関する契約を担当しました。太陽光発電コストの低減のため、太陽電池モジュールの信頼性向上と長寿命化の評価技術を研究課題とした、企業等との共同研究「高信頼性太陽電池モジュール開発・評価コンソーシアム」<sup>[1]</sup>です。

このコンソには、太陽電池メーカーだけでなく化学メーカーや部材メーカーを含め、最終的に 90 を超える機関が参加しました。各社の思惑も一様ではなく、コンソの理念の共有と、それに沿った方針からぶれない運営が求められるとともに、このような連携を想定した契約形態の事例がなかったため、適した内容の契約書をつくり込むという大きな作業が、研究を始める前にまず必要でした。コンソは第 I 期と第 II 期に分かれていました。第 I 期の課題を踏まえて第 II 期では、参加要件を一律にはせず、各機関のニーズに対応できるよう 3 つの契約区分を設けました。第 II 期の途中では、知財に関する契約内容を一斉に変更するという対応もしました。

研究者は研究に、事務職は目の前の無機質と思える作業に徹すればよいというものではありません。それが、この契約事務を通じて感じたことでした。契約書に反映すべき趣旨を把握するためには、事務職も研究の内容や意義を理解する必要があります。研究室の外でも、研究者と一緒に活動することで企業との信頼関係を継続的に確保でき、交渉事も乗り越えやすくなります。これらがあって、円滑で適正な研究活動が成り立つと考えています。

このような契約事務は、産総研で働く多くの事務職の仕事の一つにすぎません。事務職の仕事そのものの幅も広がりつつあります。また産総研という組織レベルに目を向ければ、文系大学である一橋大学との連携を通じて、技術の力だけで課題を解決するのではなく、「文理共創」によるイノベーション創出を目指そうという、新たな試みも見られます。

“研究者ではない人たち”目線での今回の紹介を通じて、これから研究所で働く可能性がある方を含めて、研究所がどんなところかを、知る機会となれば幸いです。

[1] 増田 淳, 井川 奈々子: 太陽電池モジュールの信頼性向上と試験法開発に関するコンソーシアム研究, *Synthesiology*, 9 (1), 39-50 (2016).